The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ニコライ・A・ネフスキ氏の業績と生涯
Author(s)	岡崎, 精郎
Citation	懐徳. 1962, 33, p. 61-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90376
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ニコライ・A・ネフスキ氏の業績と生涯

岡崎精郎

一

ニコライ・アレクサンドロビッチ・ネフスキ氏（Николай Александрович Невский）の遺稿集"Тангутская Филология"が二卷の巨册としてわれわれの前に現れたのは昨年のことであつたが、同書の出版はそれより以前、一昨一九六〇年のことに屬する。今年に入つて、本書にたいして科學部門のレーニン賞が授與されたが、このような故人への授賞は余り前例のないことであるという。そして本書が出版され、レーニン賞を受けるにいたつた背後には、氏の東京留學以來の友人でソ連科學アカデミー會員ニコライ・イォシフォービッチ・コンラッド氏の友情がひめられているという（大阪朝日、昭和三七年五月二七日附、秦モスクワ支局長執筆による）。本書については、さきに橋本萬太郎氏による紹介もあり（「掌中珠のタングート・漢對音研究の方法」中國語學一〇九、一三―一六頁、昭和三六年四月）、さらに西田龍雄氏の詳細なる批評もなされているが（「故 Nevsky 氏の西夏語研究について」言語研究第四一號、五五―六五頁、昭和三七年三月）、本書こそはネフスキ氏の西夏學研究成果のいわば集大成ともいうべきものであり、四十六歳という壯年にして一九三八年、惜しくも逝去せられた氏の業績にたいし、改めて敬服するとともに、その研究の、中道にして斷たれたことが、今更の如く痛惜せられるのである。

本書の刊行と前後して、氏の選集、さらに全集の刊行計畫がソヴェト連邦において進められていると聞くが、この機會に氏の業績に關して全面的な紹介を試みるとともに、その生涯をふりかえつてみることは決して無意義ではないと思う。

二

氏の略歴については、さきに柳田國男氏によつて年譜が編まれているが（「大白神考」柳田國男先生著作集第一一卷二〇〇頁）、その他の資料によつて、これを補いつつ、敍べてゆこう。

氏は一八九二年二月一八日、露國ヤロスラヴリ縣ヤロスラヴリ市に生れた。この、大ロシア人の出身ということは、純ロシア系以外の人の少くないロシア學界人の中にあつて、氏の自ら誇りとしていたところであるといわれる（石濱純太郎博士談話）。氏の父君はヤロスラヴリ地方裁判所に勤務されていた由であるが、早く兩親を失われた氏は、やはりヤロスラヴリ縣のルイビンスク市で母方の親戚の家で祖母に育てられ、一九〇〇年、ルイビンスク市のギムナジウムに入學し、一九〇九年、同校高等部を優秀な成績で卒業して、銀メダルを受賞した。同年九月、サンクト・ペテルブルグ工藝專門學校（一に、ニコライ二世帝室工科大學院）に入學した。當時のロシアでは、音樂教育が非常に進んでいたが、氏は音樂には全然興味をひかれなかつたという（高橋盛孝博士「ネフスキー氏について」日本民俗學大系第一二、二九三頁）。一年を經て、かねての希望どおりに、中國語・日本語を學ぶべく、サンクト・ペテルブルグ大學の東洋學部（一に東洋科和漢部）に移つた。氏はその「自傳」（前掲 "Тангутская филология" 所收、Н. А. Невский 小傳、C. 12 に引用さる。）において、「早くから、これらの言語に憧憬を感じていた。」と記しているという。當時、中國語教授はイワノフ氏で、後年、ネフスキ氏に西夏語資料を供與した人であつた。ところが、中國語の勉強に入つて早々に、佛教史研究家のワシリエフ氏から、「中國人すら一生かかつても覺え切れぬ漢字を外國人が學ぶのは無駄だ」と訓され、一寸考えさせられたという。日本語部には當時、正教授が缺員のままで、幕末のころからロシアに歸化されていた黑田某先生がおられ、その日本語教科書は日本外史であつたという。その他には、外務省の役人で講師にみえた某氏がおられ、チェンバレンの日本語文法のローマ字をロシア風のアクセントをつけて讀まれたという（高橋博士前掲論文二九三頁）。一九一三年の夏休みに同大學より日本に派遣せられ、二ケ月間東京に滯在して日本文學の研究に從事せられたが、その際、「長崎に着いてその日本人に教わつた言葉を使つたところ、町の人に通ぜず、情なかつた」由である（柳田國男氏「故鄕七十年」二九〇頁）。翌一九一四年五月、同大學一等卒業證書を授與せられ、同大學教授候補者に選ばれて日本語講座に殘され、同時に帝

室エミルタジュ博物館古錢學部助手となつた。氏の前途まさに洋々たるものがあつたにも拘らず、この年六月二十八日、サラエヴォに突發した凶變はひいては八月一日、ドイツの對ロシア宣戰布告に發展し、やがてヨーロッパの天地は第一次世界大戰の渦中におしつつまれた。これら一連の國際的事變は學究としてスタートした氏の前途の上に、何か運命的なものを感ぜしめずにはおかない。

しかし、翌一九一五年三月、氏は露國文部省より二年間の期間付で日本に官費留學を命ぜられた。同年七月、日本に到着し、「國・漢文學ならびに日本民俗學の研究」に從事されることとなつた（柳田氏年譜二〇〇頁）。ローゼンベルグ（佛教學專攻）、セルゲイ・エリセーエフ（日本文學專攻、後年ハーヴァード大學教授、退職後パリー在住）兩氏らも同樣、官費留學生として日本に來られたが、一ケ月五百圓の官費支給が使いきれぬ位であつたという（高橋博士前掲論文二九三頁）。しかるに二ケ年の留學期間の滿ちんとする一九一七年三月、ロシア革命は勃發し、皇帝の退位、ケレンスキー假政府の樹立をみたが、政權交替の結果として留學費送金を停止せられたために、生活費をえんがために、東京の明露壹商會に勤務するのやむなきにいたつたのであつた。

ところで、このころ、氏は柳田國男氏に師事し始められたものの如くで、一九一五年秋ごろ――といえば、東京留學後まもないころ――、折口信夫、中山太郎兩氏の紹介で始めて柳田氏を訪問し、それからはいつも三人連れで訪ねられた由で、翌年のネフスキ氏誕生日には柳田氏の方から駒込のネフスキ氏宅を訪ねておられる。なお、やはりこのころ、ニコライ・И・コンラッド氏も同道して柳田氏の教をうけられている（柳田氏「オシラ樣とニコライ・ネフスキー」大白神考所收、四一頁、「故郷七十年」二九六―七頁）。コンラッド氏は一九一二年、サンクト・ペテルブルグ大學東洋學部を卒業し、キエフ高等專門學校で極東諸民族の民俗學を講じ、また日本語と中國語を教えられていたが、一九一四年以來、日本留學を命ぜられ、二年間東京大學文學部國文學科で受講されていたのであつた（ヴェ・ツベトフ「コンラッド博士をたずねて」今日のソ連邦一九六一年二月一五日附、四號）。岡正雄氏の談話によれば、當時柳田氏御宅では折口信夫、金田一京助氏に同氏も加わつて萬葉集の研究會を開いていたが、そこにネフスキ、コンラッド兩氏が參加され、殊にネフスキ氏は言語學を專攻されただけあつて、萬葉集の解釋にも中々鋭いところをみせられたという（長谷川幾久雄氏「私の蒐集遍歷」一六頁に引くところ）。さらにこのころ、折口信夫、中山太郎兩氏にネフスキ氏を加えて、やはり柳田氏御宅で「風

土記逸文」の輪講を開いておられたという（「故郷七十年」二九〇頁）。

かくして、これより以後、氏の日本民俗學研究の成果が次々に公にせられたのであつて、一九一八年には、

(1) 農業に關する血液の土俗（以下論文にナンバーを附ける。）

の一文が「土俗と傳說」（牛島軍平編輯發行・文武堂書店刊行）一卷一號（一八―二〇頁）に出され、これは日本の場合を取扱い、とくに風土記の記事を中心とした研究で、臺灣の習俗などをも參照したものであるが、その冒頭に「露國留學生ねふすきい」の署名がある。なお、同號表紙には遠野の獅子踊の寫眞があり、これはネフスキ氏の撮影になるものであるが、續く二號には

(2) 遠野のまじなひ人形（一五―一六頁）

の一文を寄せ、三號には

(3) 相模の獅子舞の歌（一九頁）

と題して神奈川縣津久井郡島屋村のものを採り上げ、さらに同號には

(4) あづなひの罪（五五頁）

と題して、あづなひの罪をロシア民族の舊習と關連的に說き、問答體の形で記されているが、やはり同誌同號にはオレスト・プレトネル氏の「Rusalka（自殺者の靈魂？）」と題した記述があり（二六―二八頁）、Rusalka とは古代スラヴ傳說の水と森の妖精であるが、この一文にはネフスキ氏の驥尾に附して書いた旨の斷書があり、さきのコンラッド氏の柳田氏訪問・研究會參加の件とともに、この當時におけるロシア人留學生らの日本民俗乃至民俗學への關心の程を窺わしめよう。

翌一九一九年五月、小樽高等商業學校のロシア語教師に囑託せられた氏は任地に赴き、一九二二年に大阪外國語學校に轉ずるまでこの地にあり、その間、增毛の網元萬谷氏の磯子嬢を娶られたのであつたが、この赴任の年から柳田國男氏に宛てた質問狀乃至レポートが書翰の形で若干殘されている。これらは柳田國男先生著作集第一一册「大白神考」に收められているが、氏の研究對象はまずオシラ樣信仰に向けられ、北海道から往復の折にはよく相馬の高木誠一氏を訪ねて、オシラ樣の研究をされ（「故郷七十年」二九七頁）、さらに佐々木喜善氏と人力車を連ねて東北の村々を廻つてオシラ樣の調査をされた（高橋博士前揭、二九三頁）。オシラ樣とは東北日本の一部に行われる信仰現象で、ことに岩手・青森二縣では、舊い家々に傳えられた一種の祭具で、普通二本の木の執物（とりもの）の上端を、色々の布片を重ねて覆い包み、しばしばこれに人の顏を描き又は彫刻したものをオシラ

様、稀にはまたオシラボトケとさえ呼ぶものがあり、これに基いて大白神もしくは白山神などの文字を使つている人も折にはあるといわれる。このいわゆるオシラ様を手に執つて、神意を問い且つ傳えたものが、曾ては家々のアッパ（主婦）であつたことは、もはや歴然たる痕跡もなく、僅かに童幼の嬉戯の中から推測する他はないが、幸いにして他の地方の、專業巫術のまだ十分に盛行しない村々の類例を引きくらべることによつて、少しづつ以前の實狀を復原する見込がついたと柳田氏は說かれ、そして最初にその暗示をもたらしたのは、實にネフスキ氏その人であつたと述べられている（「オシラ様とニコライ・ネフスキー」二八頁）。「大白神考」に收められた氏の書翰は、一九一九年九月四日附のものを初めとし、一九二一年四月一三日附のものを以ておわつているが、一九二〇年三月二六日附書翰（「大白神考」二六六—二七七頁）でオシラサマとシベリア・シャーマンとの比較を行い（但し、日本の巫女敎はシベリア輸入のものとは結論していない。）、ツアブリカ（Czapilika）女史の著書"Aboriginal Siberia"を入手せる旨を報告されているが、本書はシベリア民族を概觀し、就中シャーマニズムに力點をおいて敍べられたものとして重要であり、氏の早くも注目せるところであつたのである。柳田氏はこれらの、オシラ様に深い關心をよせた書翰を集錄せられたあとで次の如く結んでおられる。「十何年かの日本生活に於て、ネフスキー君の心を留め、積み貯へて行つた知識の中には、この國の少壯學徒でもまだ省みなかつたものが色々あるが、わけてもオシラ様の問題などは大きな印象であり、又深い關心の的であつたことは、ここに存錄した數道の書翰からも推測し得られる。それを本國に携へ還つた後に、如何に活用し又は成長させ、且つその所得を同學の間に如何に分配したであろうか。私はもうそれを確かめる機會を持ち得ないとしても、いつの時にかまはりまはつて、日本にも其結果が傳はり、彼と袂を分つてからのこの私の一國限りの研究と、比べ合せて見ることの出來るやうな、樂しい文化の交流期が出現することを切望せざるをえない。」（「オシラ様とニコライ・ネフスキー」四二—三頁）。

三

一九二二年四月、大阪外國語學校のロシア語敎師に任ぜられた氏は、小樽を去つて大阪へ赴き、一九二九年八月まで同校に勤め、その傍ら、一九二三年八月よりやはり二九年八月まで、京都大學文學部囑託として史學科副科目のロシア語を講ぜられた。外語では一年生の初めからロシア語ばかりで授業されたが、京大の授業では、

「君たちは本が讀めさへすれば宜いのだから」と、日本語ばかりで授業され、文法は比較言語學上よりみたロシア語が一時間、ロシア語文法が一時間だけで、すぐトルストイの短篇、チエホフの短篇、翌年にはブロッホの詩、ロシア譯のジョウジアの劇などを用いられ、實に行き屆いた授業ぶりであつたという（高橋博士前掲、二九四頁）。

外語就任より以後、一九二九年の歸國まで、八年にわたる大阪生活が始るが、氏の學問生活もここに大なる轉換をとげることとなつた。すなわち、從來の日本民俗學研究の上にさらに、大阪を足場として研究が進められることとなつたのであつて、一九二三年六月、石濱純太郎、高橋盛孝兩博士とともに大阪外國語學校の中に大阪東洋學會を結成せられたが、やがては氏の業績がこの會より發刊せられることとなるのである。さらに一九二七年七月、石濱、高橋兩博士、淺井惠倫氏、笹谷良造氏とともに靜安學社を發起して幹事となられたが、同學社は發足より以來、大阪市東區豐後町にあつた懷德堂の小講堂を會場として毎月の研究例會を行い、戰前戰中の大阪における東洋學研究者の據りどころとなつていた。「靜安學社一覽」（昭和一六年刊）にのせた靜安學社緣起に左の如くある。

昭和二年春夏の際、高橋盛孝同好會合して學術を商榷するの議を主唱す。ニコライ・ネフスキ、石濱純太郎之に贊同し、相會して學會創立の案を立つ。適々我等の仰望せる王靜安先生遽に大節を完うするに値ふ。乃ち先生を記念して學社の名を定め、以て景仰の意を明にす。秋九月二十五日を以て第一會を發して靜安學社成る。此を創設の緣起と爲す。

すでにこれよりさき、一九二五年夏、ネフスキ氏は北京に赴き、王國維氏に面會されてより、王氏に傾倒しておられ、ここに靜安學社の名を擇んだのは、氏の首唱に基いたものであつたという（石濱博士談話）。さて、關西、とくに在阪諸學者との接觸は氏の研究活動に大なる影響を與えずにはおかなかつたのであつて、氏の西夏學研究も實にこの接觸の間に端を發したものであつた。つとに、「コズロフ蒐集」（東亞研究五―四・五、大正四年）において、コズロフ・コレクションに注目され、さらに「西夏學小記」（支那學一卷三號、大正九年）およびその續篇（同誌三卷二號、大正一一年）において、西夏學の展開に注目されつつあつた石濱博士は、氏にたいしてソヴェト連邦所在資料を驅使することによつて、西夏語研究を推進すべく勸奬せられたが、一九二五年夏、北京へ旅行した氏が、イワノフ博士から西夏語研究資料を入手したことは、西夏學發達史上、きわめて重要な事項であり、それは後年、氏自身特筆せられているところである（「西夏語研究

小史」北平圖書館々刊四卷三號）。

もとより、從來の日本民俗學研究はこの後も依然として推進されたのであつて、日本の古語、古俗を調べるには、東北地方と西南諸島を調査すべしとの大方針を夙に樹てられていた氏は、大阪赴任ののち、二度までも南方調査の旅に出られ、一九二七年には臺灣に赴いて曹（ツオッ）族のフィールド・ワークを試みられたが、この研究成果は後年まとめられた（後述）。臺灣旅行ののち、布施の田舍家に住まれた氏は、屋內に蛇を飼い、蛇はロシアにはいない、きれいなものだといつて珍重せられ、蛇のアルコール漬を部屋におき、蛇皮の靴をはき、蛇皮の杖をついておられたという（石濱博士談話）。さて、南方の調査報告として、一九二六—七年にかけて、民族一卷三號（一七—三〇頁）・二卷一號（三七—五三頁）に

(5) アヤゴの研究二篇

を分載せられた。アヤゴとは宮古島の戀歌のことであるが、引續き同誌二卷四號（一五三—六二頁）に

(6) 宮古島子供遊戲資料

をのせている。のちに、宮古うた六〇篇（これはアヤゴとは別のもの）許の研究論文草稿としてまとめ上げられ、新村出博士より學位論文として提出すべく勸奬せられたものも（石濱博士談話）、その着手せられたのは恐らく同じところであろう。ネフスキ氏が宮古島から歸られた際、その調査報告を聽かれた柳田氏の記されるところによれば、宮古島の言葉は大體三系統に分たれ、

(A) R音をZ音に發音するもの。
(B) Rの代りにLを用いるもの。
(C) 普通に沖繩あたりで使つているように、ドロップ（落音）するだけのもの。

となるが、この三系統の交錯・共存がいかにして成立したかという點に關心を抱いたネフスキ氏は大變苦勞してノートをとられた。氏は耳が少し遠いにも拘らず、巧みに聞き分けられ、そして仕分けが極めて優れておられたという（「故郷七十年」二九五—六頁）。さらに一九二七年には、「音聲の研究」（音聲學協會、東京）第一輯に、

(7) 琉球の昔話鶉の話の發音轉寫

をのせられている由であるが、これはなお參照の機會をえていない。一九二八・二九年ごろ、氏は京大において、ロシア語の講義の他に、アイヌ語、さらに沖繩方言に關する講義を行われた由であるが（三品彰英博士御教示）、沖繩方言の講義のもとになつたものは、ネフスキ氏歸國の際に殘されて現在、藤澤の長谷川幾久雄氏の所藏になつているノートであつたらしく、本ノートはその寫眞が東大服部四郎教授のもとに委託せられているという（「故郷

七十年」二九四―五頁)。柳田氏はネフスキ氏の、日本の學界のために盡された仕事の一つとして、沖縄の言語の研究をあげられ、日本語と沖縄語とが同じであるということの證明に數字などを使い、「主として首里とか那覇とかのおそろしく變化した言葉の形と、京都あたりの言葉とを比べ」るやり方にはどうも同意出來ぬのにたいして、ネフスキ氏のやり方は、現地へ行き、現在の言葉が、何年何月ごろのどこではこれこれという風な報告をしており、非常にはかのゆかぬ仕事だが、その功績は無視出來ない、日本語と沖縄語とが共通であるという結論は兩者同じでも、それを導き出す方法には歸納の方が演繹よりも妥當であるとつけ加えられている(同右、二九二―三頁)。

この他、一九二七―二八年にかけて、「民族」誌上に、

(8) 美人の生れぬわけ(二七年、二卷二號、一五六―七頁)

(9) 月と不死(若水の研究の試み)(一)・(二)(二八年、三卷二號・四號、一七―二四頁・四五―五二頁)

の民俗學研究論文二篇をのせられており、後者は若水の研究として注目すべきものであるが、さらに同誌二卷四號(一〇一―六頁)には

(10) 故シュテルンベルグ氏―其小傳と著作―

の一文をのせておられる。同誌同號にはなお、石田幹之助教授の「シュテルンベルグ教授の計」の一文を收めているが(九五―一〇〇頁)、シュテルンベルグ氏のギリヤク語文法は氏の丹念に讀破せられたものの如くで、後にもふれる如く、臺灣のツオゥ族の言語研究の場合にもテキスト本位の方法を適用し、それはシュテルンベルグの影響であるといわれている(淺井惠倫氏「台灣言語學はどこまで進んだか?」民族學研究一八卷一・二號一四頁)。さらに、昭和初年、高橋盛孝博士が京大において氏のロシア語講義を聽かれた際、「民俗學の研究法について教室以外でいろいろ懇切な御指導を受け、」「ギリヤク語についても、先づ御祕藏のシュテルンベルグの文法を貸與せられ、自分はそれを全譯したうえで或る日曜日の午前八時から夜十二時まで先生の前でこの譯を讀み上げ、先生はテキストを見ながら一々批評訂正を加へて下さつた。」由である(高橋博士「樺太ギリヤク語」昭和一七年、一頁)。

四

以上の如く、大阪轉任を機として、氏の研究領域は一段と廣まり、東北民俗の研究から進んで西南諸島の民俗・言語の研究へ及んだのであつたが、さらに氏の研究の中で特筆さるべきものは西夏語資料をめぐつてのものであつた。その第一著作はさきにのべた大阪東洋學會から亞細亞研究第四號として刊行せられたのであつて、

(11) 西蔵文字對照西夏文字抄覽　XXIX. pp. 85.

がそれである（一九二六年三月一五日刊行）。本書は前年の夏、北京へ赴き、イワノフ博士を訪ねて將來された西夏語資料――イワノフ博士出版の對譯觀彌勒上生兜率天經をはじめとする、チベット文字を附した西夏佛典――を活用されて成つた業績にして、これら佛典は表音文字のチベット文字を以て西夏字の發音を注してあるから、西夏語の音韻を論ずるには不可缺のものであつた。同書の自序は一九二五年一二月附であるが、石濱博士の同書序文に、「今歴山（ネフスキ）君がこれ（西夏佛典）に出てゐる文字を編纂して一の發音字書となして世に貽るは蓋し西夏音韻學の基礎を築くもの」とせられている（Ⅶ頁）。引續き、一九二六年一一月には內藤湖南博士還曆記念論文集に獻呈すべく、

(12) 西夏助辭攷略

の一篇を物され、同稿は一九三〇年にいたつて、「內藤博士頌壽記念史學論叢」（四三九―四五一頁）に收められ、今回そのロシア譯が前掲書（T. Ф. c. 140–152）に載せられているが、それは前記新資料の他に、西夏譯法華經第七卷を羽田亨博士より借覽參照されて成つたものであつた。さらに翌一九二七年には、

(13) Concerning Tangut Dictionaries

を著され、これは一九三〇年刊行の「狩野教授還曆記念支那學論叢」（二七―四一頁）にのせられ、これまたそのロシア譯が前掲書（T. Ф. c. 95–106）に收められたが、これはイワノフ博士提供になる「同音」・「文海雜類」・「文海」など、西夏人の手になる音韻書を紹介せられたものであつた。やはり同年、石濱博士との共譯になる、

(14) 西夏文般若經の斷片（藝文一八卷五號）

が發表せられたが、やはり同年、氏と石濱博士の共譯で、ペリオ・コレクション中の、

(15) 西夏地藏菩薩本願經殘紙

が「典籍の研究」（大阪・玉樹書店刊行）六號に出され、それは大正藏經第一三卷（七八六頁中二八行―下一三行）に相當することが證せられた。

以上の諸業績と相まつて、このころ、西夏語辭典作成の仕事は着々とすすめられていた。前年、北京でイワノフ博士より入手された資料に加えて、一九二八―二九年ごろにはレニングラードのアジア博物館のコズロフ・コレクションもオルデンブルグ（S. F. Oldenburg）、アレクセーフ（V. M. Alexiev）兩氏によつて利用の途が開かれていて（ネフスキ「西夏語研究小史」三九九―四〇〇頁）、これら資料に基きつつ、西夏對音字彙を增補した稿本ノートは作成されつつあつた（石濱博士「西夏語研究の話」東

洋學の話所收一九八頁)。それに收められた語彙の數は、今回出版の書物に收められたものよりは少かつたようだといわれており(石濱博士談話)、このノート二册の稿本は氏の歸國に際して、石濱博士の御手許に留めおかれたのであるが、誠に殘念なことに、他人に借出されたまま、現在行方不明となつている。なお、同稿本の卷尾には、"Innermost Asia" Vol. III. (CXXXIV～CXXXVII)のカラホト出土西夏文書の、B. Laufer の手になる注釋にたいする訂正が施され、それは、チベット文字の注音を附した西夏文字五百以上にわたるもので、この部分のみは氏の歸國に際して東洋文庫に寄託せられたという(「西夏語研究小史」三九八頁)。結局、同稿本ノート二册は氏の歸國に當つて殘置され、氏としては歸國後別に改めて稿本を作成し、それが今回出版せられたものとみるべきであろう。

さらにこのころ、アジア博物館から數多くの西夏文佛典の寫眞がもたらされた中に、チベット文より譯出された西夏文經典があり、それはオルデンブルグ氏によれば、「五部經」(Pañca-rakṣa)の一であるというが、氏はその全文を三部に分ち、その第一部分を日本文に譯出し、注を附されたことを自ら記されている(「西夏語研究小史」三九九—四〇〇頁)。同稿本の成つたのは氏の歸國直前、一九二九年中のことの由であるが(石濱博士談話)、しかし、同稿本もまた今日その所在の明かならぬのは遺憾である。

ともあれ、歸國前の一二年間のネフスキ氏の努力はすさまじいものがあり、殊に西夏語の研究になると精魂を盡しておられたと傳えられている(石濱博士「西夏語研究の話」一九八—九頁)。ネフスキ氏の歸國事情は詳かでないが、柳田氏によれば、地位が不安なので、歸國して正式の地位を得んとされたものであろうといわれる(故郷七十年」二九一頁)。氏自身が「西夏語研究小史」(三九八頁)に記されているところによれば、一九二九年秋に歸國の準備をせられた由で、恐らく同年中に歸國せられたものであろう。因みに、大阪外國語學校には同年八月まで勤められており(精松源一教授の御調査による。)、京都大學も同月末まで在職せられている(西田龍雄氏の御調査による)。なお、夫人は同伴されず、後から入國手續をして赴かれたという(石濱博士談話)。

さて歸國草々に氏はソ連邦科學院において、西夏語に關する研究發表を行い、科學院會員にして有名な東洋學者であつたバルトリド(B. Бартольд)教授の絶賛を博されたというが(石濱博士談話)、この後、石濱博士と共著で陸續と業績が公にせられた。すなわち、一九二九年に、

(16) 西夏語譯大藏經考（龍谷大學論叢第二八七號、一八―二五頁。周一良氏による漢譯は北平圖書館々刊四卷三號所收、一九三二年刊行）

を出されたのをはじめとして、翌一九三〇年には

(17) 蕃漢合時掌中珠（書評）（史林一五卷一號、一九三〇年一月）

が書かれ、さらに一九三二年には

(18) 西夏文八千頌般若經合璧考釋（北平圖書館々刊四卷三號、二四七―二五八頁）

を出され、續いて翌年には

(19) 西夏語譯大方廣佛華嚴經入不可思議解脱境界普賢行願品（マユーラ、一九三三年一二月。本論文では廣瀨督氏も共著者として名を連ねられている。）

が公にされたが、マユーラ誌の論文はなお目睹の機會をえていない。別に、西域考古圖譜下卷、西域語文書(22)の(3)・(4)の不明語文書斷片を譯出して、

(20) 于闐文知炬陀羅尼經の斷片（靜安學社叢稿）（龍谷大學論叢三〇二號、一一一―三頁、一九三二年五月）

を公にされたが、これはさきに靜安學社第七回集會（昭和三年五月二七日）において發表せられたものをまとめられたものであつた。

一方、ネフスキ氏個人で發表されたものとしては、前掲「北平圖書館々刊」四卷三號に、

(21) 西夏國書殘經釋文及び類林釋文（二四一―六頁）

(22) 蘇俄研究院亞洲博物館藏西夏文書籍目錄二則（三六七―三七七頁）

(23) 西夏語研究小史（三七九―四〇三頁）

の三篇がある。(21)の「類林」の撰者は詳かでないが、新唐書卷五九・宋史卷二〇七の藝文志には夫々「于立政類林十卷」が見えている。(22)によつて、

天盛年變新民制學（卽西夏法律集、刊本）

十二國（三卷本、由漢語譯成之歷史書、刊本）

無題之西夏詩文集（刊本）

など、直接歷史關係の資料の見出されたのは（三七二頁）、西夏史研究上、きわめて重要であり、とくに「天盛年變新民制學」（1149年―1169年の間のもの）は後年、やはり氏によつてその所在を明らかにせられた「光定壬申新法」（1212年のもの）とともに（後述）、西夏史研究上、さらに東洋法制史研究の上から重要な文獻であり、ともすれば漢文史料にのみ局限される嫌いのある西夏史研究にあつて、新なる面を開くものとして、その史料的意義は重要なものがあり、これらを活用することによつて研究面の進展を期すべきである。(23)は一九三一年に發表されたものの漢譯であるが（Очерк историй тангутоведения.

《Известия Академии Наук СССР》, отделение общественных наук, 1931.)、當時までの西夏學史として貴重である（本論文ロシア文も前掲書（Т. Ф.）に收められる。С. 19-32.）。さらに一九三三年に

(24) 西夏國名考（О наименований Тангутского государства. 《Записки института востоковедения Академии Наук СССР》, Т. II, вып. 3.）

が發表され（本論文も前掲書（Т. Ф.）に收められる。с. 33-51.）、これに加えて同年に、

(25) 西夏國名考補正（龍谷大學論叢第三〇五號、一―一二頁）

の一篇が石濱博士と共著で公にせられたが、(25)は王靜如氏の「西夏國名考」（歴史語言研究所單刊甲種之八・西夏研究第一輯所收、七七―八八頁）の中、とくにその中の白彌という名稱に關する考證の批判であつた。さらに數年ののちに、

(26) 西夏文字とその蒐集品（Тангутская письменность и ее фонды. 《Доклады группы востоковедов на сессии Академии Наук СССР 20/III 1935 г., М.-Л. 1936.）

が公にされ、本論文も前掲書（Т. Ф. с. 74-94.）に收められている。本論文においては、西夏人の詩集の他に、西夏人の創作になるものとして、

1、德行集（сборник добдестного поведения）と稱せられるもの。
2、聖立義海（море начертаний）
3、占星書
4、醫學書
5、法律書
6、賢智集（Изречения）と稱せられるもの。

などの、ソ連東方學研究所（さきのアジア博物館）の資料類をあげている。「聖立義海」は五册から成る西夏の百科辭典で、內容は十五篇より成つていたというが、その一部しか現存していない。「賢智集」とは格言集で、その一つは一一七六年に梁德養（漢人か）が口頭傳誦の格言をまとめ上げたもので、他の一つは王仁持（やはり漢人か）が自己の格言を編集して、一一八七年に出版したものであるという。法律書としては、さきの「目錄」にあげられた「天盛年變新民制學」の他に「光定壬申新法」のあることが調査せられており、醫學書としては、紫苑丸（Aster tartaricus）という丸藥の處方を記したテキストなどがある他に、占星書としては、骨勒（Гу-ло）部の仁慧によつて一一八三年に作られた「大陰五星集」（сборник гайн пяти планет）と呼ばれるテキストがあ

り、また未來の子供についての占いや、鳥の叫び聲についての占いを書いた寫本があり、それらの記述には、中國の占術からの影響を感ぜしめるものもあるというが、鳥の叫び聲の占いの如きは、チベットの鳥占いとの關連を考えしめるものであり（B. Laufer; Bird divination among the Tibetans. T'oung pao,1914）、筆者がさきに試みた西夏の占トに關する考察（「西夏の民族信仰について」古代學五卷一號、一二—二一頁）もこれら新資料を加えて檢討し直されねばならない。

以上はネフスキ氏生前に發表せられたものであるが、この他にも多くの遺稿が歸國後の業績として殘されており、今度その中から前掲書（T. Ф.）に收錄されたものとして次の諸篇があげられる。すなわち、

(27) 十二世紀西夏國における天體崇拜について（Культ небесных светил в Тангутском государстве XII века.）с. 52–73.

(28) 西夏語音研究に對する諸資料（Материалы для изучения Тангутского произношения.）с. 107–131.

(29) 西夏語の韻圖（Тангутские Фонетические Таблицы.）с.132–139.

(30) 語彙・文法諸資料（Лексико-Грамматические Материалы.）с. 153–162.

があり、さらに本書の大半（第一部、с. 167–601. と第二部全體、с. 5–666.）を占める。

(31) 西夏語字典（Тангутский словарь.）

がある。(27)は星宿について詳述したものであるが、西夏の星宿については、淳祐天文圖など宋代の星宿（藪內清博士「宋代の星宿」東方學報第七册、四二—八九頁參照）との比較研究が必要であろう。(28)では西夏音研究の資料を(A)西夏・漢語（の音對照）資料、(B)西夏・チベット語（の音對照）資料、(C)純粹の西夏資料に三分されて、夫々解說されたものであり、「同音」・「文海」・「文海雜類」・「文海寶韻」などの韻書が紹介されたが、(29)では以上の韻書と性格を異にする「五聲切韻」なる韻圖をとり上げている。しかし、これらの韻圖韻書を組み合はせることによつて、果して西夏語の音素體系をわくづけ得るやについては、西田龍雄氏の批判を聽かねばならない（前掲「故 Nevsky 氏の西夏語研究について」五九—六〇頁）。(30)においては、七つの單語——土耳古玉・藥・森・李・葡萄・土と砂・一塵・蓮華——に考證を加えて、B. Laufer の諸論文にみえた見解を發展させ、なお、形容詞、代名詞、數詞について略說している。(31)の「西夏語字典」の體裁は、一つの西夏字にたいして、(A)漢字による音表記とその中國音、(B)チベット文字による音表記、(C)ネフスキ氏の推定音、(D)

「文海」・「文海寶韻」の韻類および文字ナンバー、(E)「同音」の歸屬類、(F)漢譯（ときにはチベット譯も）、(G)英譯とロシア譯、(H)使用例、(I)親近言語形の指摘などが附せられている。（尤も、文字毎に以上すべてが滿たされているわけではない。）本字典は氏の遺稿ノートを寫眞複製したものであり、故人としては未だノートのままで十分整理されていないままで公にされることは不本意であろうけれど、かかる重要な研究成果を公にせられたことは、それ自體、西夏學發達史の上に一時期を劃するものである。

以上みて來たように、氏の西夏學研究は歸國後も着々と進められていたが、さらにその他の面においても逐次發表を續けられていた。それらの多くはなお目睫の機會をえていないが、一九三四年にはコルパクチー（Е. М. Колпакчи）氏と共著で、

(32) 日本語—初級コース—(Японский язык (начальный курс), издание Ленинградского восточного института.)

を出された他に、オルデンブルグ記念論文集に、

(33) 虹語源考 (Предоставление о радуге, как о небесной змее,—《Сергею Федоровичу Ольденбургу к пятидесятилетию научно-общественной

деятельности 1882–1932》с. 367–376.

の一篇を寄稿しておられるが、オルデンブルグ記念論文集についてはつとに石濱博士の御紹介がある（東洋史研究一卷二號、四〇—四三頁）。引續き、翌年には、

(34) 六—八世紀、古代日本の儀禮的詩歌（祝詞）(культовая поэзия древней Японии (VI–VIII вв.) (Норито). Перевод с японского, вступительная статья, примечания,—《Восток》, кн. 3, м–л., 1935. стл.15–30.

(35) アイヌの民間傳承 (Айнский Фольклор. Перевод, вступительная статья, примечания, Там же.

の二篇を出された。前者については、東京滯在時代より氏の日本柳田國男氏を中心とする研究會その他において推進され古代文學研究が、萬葉集、風土記よりさらに進んで祝詞に及んで行つたものとみるべく、後者については、すでに小樽滯在時代より關心をもたれていたものとみるべきで、なお、アイヌ語については京都大學で講義せられたのであつた（前述）。さらに、"*T. Ф.*" 第一部 (с. 15.) にのせたネフスキ氏著作目錄によれば、

(36) Построчный словарь к японскому рассказу. 《Передовой пост》, издание Ленинградского восточного института, б/г, б/м,

(37) Построчный словарь к японскому рассказу. 《Старуха повесилась》, издание Ленинградского восточного института, б/г, б/м.

の二篇の日本民話の對語辭典が出され、その刊行年次は詳かでないが、やはり前記論文と一連の述作とみなされよう。但し、ここの二篇の日本民話の內容は詳でなく、(36)の民話のテーマは「前の官」の意、(37)のそれは「首くくりの老婆」の意であるが、民話の實體が明かでないので、日本の何處の民話なのか突止められぬのは遺憾である。

同じく一九三五年には、

(38) モスコヴィーよりソ連へ（十月と日本語）(Or《Московий》к СССР (Октябрь и японский язык),—《Записки Института востоковедения Академии наук СССР》, т. V, м.-л., с. 42–53.

が發表せられ、本論文もまた見ていないため、その內容がよく判らないが、K. A. Popow, Bibliographie der Arbeiten sowij. Wissenschaftler über das Japanische.（原文はロシア文の飜譯）(Z. D. M. G, Bd. III–Heft I, 1961, S. 156.) によれば、„Sprachgeschichte" に屬する述作にして"Московий (Moskowija) とは、„veraltete, von Ausländern gebrauchte Bezeichnung für Russland" であるという。

なお、やはりこの年には、

(39) 曹族方言資料（Материалы по говорам Цоу.—《Труды Института востоковедения Академии наук СССР》, Т. XI, М.-Л., стр. 136.

が出された。高砂族のツオゥ族は阿里山及びその附近に住み、狩主農從の生活を營み來つたもので、ツオゥとは人間の意であるという（增田福太郎氏「原始刑法の探求」八頁）。ツオゥ族の言語研究は淺井惠倫氏の慫慂になるもので（高橋博士「ネフスキー氏について」二九四頁）、一九二七年、臺灣に赴いて調査された結果をここにまとめ上げられたのであつた。淺井惠倫氏は「臺灣言語學はどこまで進んだか？」（民族學研究一八卷一・二號）と題する論文において、臺灣語を研究した異邦人として、Otto Scheerer (1938歿) の次にネフスキ氏をあぐべしとし、ネフスキ氏はいかなる音でも眞似ることが出來、蕃族の言葉を音字を以て直ちに筆記出來たと記されている（同上、一四頁）。本書の引用文獻はヴァライアチーに富み、言語關係、臺灣蕃族慣習關係文獻は無論のこと、柳田國男、松岡靜雄兩氏らの述作、さらに栗田寬氏「古風土記逸文考證」（東京、一九〇三年）にも及んでおり、「風土記逸文」は柳田氏御宅における輪讀會より以來、氏の手がけられた

ものであつた。このことは、氏の言語學、このことは、民俗學研究における獨特な方法を窺わしめるものであろう。

以上、氏の歸國後の業績を通觀してみるのに、西夏學並びにその他の方面の研究をも含めて、氏の生前における發表は一九三五・六年のころを以て終を告げ、一九三八年逝去せられたのであつた。

六

ネフスキ氏は日本からの歸國に際して、それ迄書きためられたノート類、カード類を藏書とともに夫人の實家に預けられた。何故にこのようにせられたのか、その間の事情は判らない。ところで、その資料類及び藏書を收めた大型トランクは種々の事情のために、小樽の古本屋の手に入り、それが拓植銀行におられた長谷川幾久雄氏の收藏されるところとなつた。その經緯については長谷川氏が詳しく記されている（私の蒐書遍歴」一四頁以下）。長谷川氏はネフスキ氏舊藏書の中、ロシア語のものを除いて目錄を作られているが、筆者は未だ見ていない。しかし、長谷川氏が前掲書の中に紹介されているところによつても、特殊なコレクションとして注目さるべきものと思われるが、さらに重要なものは殘された遺稿ノート數十册であつて、その主なものは西夏語と日本古語に關するものであるといわれ（本年四月一七日附、長谷川氏の筆者宛ての御來信による。）、その中で沖繩方言に關するノートは寫眞に撮られたが（前述）、その他にも、日本に留めおかれた西夏語字典の下書きと考えられるものも含めて數多くのノート類があり、今後の研究資料として活用されんことを切に願うものである。

さらに、歸國後の氏の業績の中、西夏學研究に關した論文九篇は西夏語字典とともに前掲書の中に收載せられたが、その他にも、「氏の筆になつた、多くの學問的に非常に興味のある勞作が今なおその發表を待つている。」と傳えられる上に（З. И. Горбачева, Н. А. Невский как Тангутовед. с. 10–11. 前掲書所收）、西夏學以外の研究業績にいたつては、發表濟みのものでも今日殆んど見ることの出來ない現狀においては、小篇冒頭にふれた、ネフスキ氏の選集、さらには全集の刊行計畫が達成せられんことを切に期待するものである。その際には、日本に殘された資料類も併せて檢討さるべきであろう。

さらに、ネフスキ氏が鋭意調査をすすめられたコズロフ・コレクションはその後、東方學研究所において、ゴルバチェーバ女史らによつて、整理が續行されて登錄番號も附せられているが（З. И. Горбачева, Тангутские рукописи и ксилографы Института востоковедения

Академии Наук СССР. с. 67–89. Ученые записки Института востоковедения. ТОМ. IX, 1954.)、整理濟みのものから寫眞版にして公開して頂きたい。かくすることによつて、西夏學研究の途はさらに大きく開かれるであろうことを期待しつつ、筆を擱くものである。

ニコライA・ネフスキ氏の業績と生涯正誤表

七四頁下段十三行

た氏の日本は十四行で推進されの下に入る

七六頁上段一行

このことは、氏の言語学、このことは、民俗学研究……

削る